



年老いて雪吊欲しくなりけり
身に纏ふ長子遺愛のちゃんちゃんこ
冬うらら昔男はすぐに泣き
熱爛や廃炉作業に出稼ぎす
一里一尺奥歯ぬかれて大き穴
糖を煮る太平洋の駝蕩に
吹革始火の湧く音をじつと待つ
地の熱を逃がさぬかたち落の臺
余所行きの顔のぞろりと雪後の木
白息をもてむらぎもを整へぬ
稜線や雪降り足りて空平ら
初風や沖に潜める艦
風を切るときに鷹の眼青むらし
年の尾や和毛密なる山羊の耳

*

東風や上路の山の潮まみれ
咳の親玉咳の子分を使ひけり
半鐘を鳴らせど雪の降りつづく
春光になほ爆風を見るやうな
大寒の喧騒少年と鼯
枯齒朶の地母神抱きをる形
降誕祭指紋の中に銀河系
タピスリー冬の黄昏織り込まれ
今生やけふ降る雪のあたらしき
手に入れて輝き失せし毛皮かな
元旦の一座の中や鳥・獣
林冠に組まるる星座去年今年
初雪やいい眸して少年僧
四方の春柩に入る体験会
びようびようと弥三郎ばさの吹雪まく
枯山は飴返さず吾子は亡し

円城寺 龍
住 斗南子
満田 光生
幹 自聲
田中 純子
眞榮城いさを
窪田 英治
岩間 嘉一
米山 節子
功刀 たかね
柴田 きよ子
一志 貴美子
鎌田 文子
西牧 千恵子

幹 自聲
金子 圭子
清水 逍径
秋山 格雄
中岡 草人
原田 宏子
島田 葉月
小伊藤 美保子
遠藤 靖子
北村 宣枝
さとう ゆう
平野 規子
河野 正子
水谷 亮一
木村 由里子
上條 忠昭

岳半世紀へ・拓くことば 三月

(463)

宮坂 静生

はじめに。いま金子兜太が逝去との報が入る。二月二十日夜十一時四十七分。九十八歳。哀しみに堪えない。生(なま)のことはを猥(わ)雑(ざつ)にならないで用(もち)いることの名人。実感(じつかん)を率直(そつちく)な言い方でまとめ上げる達人。人間存在(じんかんそんざい)が無(む)限(げん)の魅力(みんりょく)をもった人。明快(めい快的)でしかも繊細(せんさい)。晩年(ばんねん)、感性(せんせい)の大切(たいせつ)さを特に言(い)われていた。代(か)わる人は当分(とうぶん)出(で)ないのではないかな。

雪吊欲しとの感性

年老(としお)いて雪吊(ゆきつり)欲(ほ)しくなりにけり 円城寺 龍

なぜ雪吊(ゆきつり)が欲しいのか。植木(うきぎ)への心配(しんぱい)ばかりでなく、生きる平衡感(へいこうかん)の上(う)から天上(てんじやう)へ吊(つ)り上げる紐(ひも)がほしいとの思い。別に、首(くび)を吊(つ)る衝動(しょうどう)ではないが、引き上げてくれるものへの願望(がんぼう)が生まれた。わかるのである。作者(そしや)の感性(せんせい)のよさの一句(いちご)。

身(み)に纏(まと)ふ長子(ちやうし)遺愛(いあい)のちゃんちゃんこ 住 斗南子

九十歳(きゅうじゅうさい)をはるかに越(こ)えた長寿(ちやうじゆ)の作者(そしや)にとり、亡(な)くなられた長子(ちやうし)。逆縁(ぎやくえん)。遺愛(いあい)のちゃんちゃんこをまといながら、体感(ていかん)と

るような気持(きもち)であつたであらう。大掴(おほつか)みな大景描写(たいけいぎやう)にかえつて、島人(しまじん)のことしの生業(せいごふ)への期待(きたい)が滲(にじ)む佳句(けいご)と思う。

吹革(ふいこ)始(はじめ)火(ひ)の湧(わ)く音(おと)をじつと待つ 窪田 英治

新年(しんねん)の「吹革始(ふいこはじめ)」の作。刀鍛冶(たうたんぎや)などの吹革始(ふいこはじめ)への着眼(てつがん)にベテランの貫禄(くわんろく)を感じる。若手(わかしゅ)の代表(だいひょう)のように見(み)られてきた作者(そしや)もいよいよ職人詠(しやくじんぎ)などに独自(どくじ)さを出(で)し、高き(たかき)を目指す気持(きもち)の昂(たか)りを示(し)したものの。句(ご)の内側(うちがは)に緊迫感(きんぱくかん)がある。

地(ち)の熱(ねつ)を逃(のが)がさぬかたち落(お)の臺(とう) 岩間 嘉一

今月の秀句

熱燭(あつそく)や廃炉(はいろ)作業(さぎやう)に出稼(でかせ)ぎす 幹 自聲

フクシマの原子力発電廃炉(げんしりきはつでんはいろ)作業(さぎやう)であらう。雪深(ゆきふか)い北陸(ほくりく)の地(ち)から冬期出稼(ふゆきしでかせ)ぎに行くという。熱燭(あつそく)で体(てい)を温(ぬ)めないとい、おいそれと出(で)かけることができるものではない。お金稼(かねかせ)ぎという経済的(けいぎてき)な現実問題(げんじつもんだい)があらう。現代(げんたい)の最先端(さいせんぱん)の仕事(しごと)という自負(みづか)りも加(く)わり、いかにしても動かせない現実(げんじつ)を底辺(ていぺん)からなんとか変(か)えたいという思いもある。句材(ごうざい)の特異(とくい)さにびっくりした。被曝汚染(ひばくおうれん)に十分(じふぶん)気(き)を用(もち)い、作業(さぎやう)のはかどることを祈(いの)りたい。

して子息(しよしき)はいずこにと偲(おも)ふ。人の世(よ)の無常(むじやう)がわが身(み)の上に及(およ)んではじめて、万物(ばんぶつ)への愛(あい)を思(おも)うのが人情(にんじやう)。人情(にんじやう)を噛(か)みしめた作(さく)として静(しず)かに納得(なつとく)されよう。

冬(ふゆ)うらら昔男(むかしおとこ)はすぐに泣(な)き 満田 光生

業平(えいへい)でも光源氏(くわんげん)でもいい。涙(なみだ)もろいのが色好み(いろこのみ)の男(おとこ)の身上(みみだり)。悲喜(ひき)こもごも、なにかという泣(な)く。水分(みずぶん)が多い体質(ていしつ)が日本(にっぽん)の古典(こてん)の登場人物(ていじやうにんぶつ)には多い。冬麗(ふゆれい)の一日(いちにち)、源氏物語(げんじものがたり)でもひとといった実感(じつかん)か。蕪村(うらむら)研究家(けんきゅうか)の作者(そしや)。共感(きかん)する面(めん)があつた。

一里(いちり)一尺(いっしやく)奥歯(おくば)ぬかれて大(おお)き穴(あな) 田中 純子

北(きた)へ一里(いちり)すすむと一尺雪(いっしやくゆき)が深(ふか)くなる。北信濃(きたしんのう)の雪国(ゆきくに)をほうふつさせる。奥歯(おくば)を抜(ぬ)いた。舌(しほ)がよくそこへ行(い)く。外(そと)は雪(ゆき)。口中(くちゅう)の舌(しほ)を動か(うご)かすのみ。やるこが外(そと)にない。おかしみ。

糖(とう)を煮(に)る太平洋(たいへいよう)の駝(た)蕩(とう)に 眞榮城(ま栄城)いさを

「駝蕩(たとう)」が春(はる)の季語(きご)。この用(もち)い方は珍(めづ)しい。宮古島(みやこしま)の作者(そしや)にとり、黒糖(くろとう)を煮(に)る時期(しき)の太平洋(たいへいよう)のゆつたりとした春色(はるいろ)は折

春先(はるさき)の落(お)の臺(とう)のどかつと翼(よく)を休(やす)めたような形(かたち)はおもしろい。作者(そしや)はそれ(それ)を春寒(はるかん)の頃(ころ)、「地(ち)の熱(ねつ)を逃(のが)がさぬかたち」と捉(とら)えた。川中島(かわなかつじま)の桃栽培(とうかいばい)に堪能(たんのう)な桃園(とうえん)の主(ぬし)だけに、植物(しょくぶつ)の気持(きもち)がわかるもの。気象(きさう)に伴(とも)う地熱(ぢねつ)のあり方(ありかた)など、科学的(かぎてき)な目も働(はたら)いている。視線(しせん)の低(ひ)さに地(ち)への愛情(あいじやう)がある。

余(よ)所行(しょぎやう)きの顔(かお)のぞろりと雪後(せつご)の木(き) 米山 節子

雪(ゆき)を冠(かん)った木(き)の、些細(せさい)を隠(かく)しつくりつた姿(すがた)を「余所行(よしょぎやう)きの顔(かお)」と見た。褻(け)の顔(かお)と晴(はれ)の顔(かお)の違い(ちがひ)を深雪(ふかゆき)の自然界(しぜんかい)に見(み)つけた、しみじみした生活者(せいかくしや)の情感(じもん)に共鳴(きめい)した。雪国(ゆきくに)人の発想(はつさう)である。

白息(しろいき)をもてむらぎもを整(ととの)へぬ 功刀(こうた)たかね

呼吸(こそ)が群肝(ぐんかん) (体内(ていみ)の臟腑(ぞうふ))を整(ととの)えるのはあたり前(あたりまえ)といえはその通り。寒(ふゆ)の時期(しき)の「白息(しろいき)」なのが清冽(せいれつ)でいい。堅実(けんじつ)。

稜線(りやうせん)や雪降(ゆきふ)り足りて空平(くらたい)ら 柴田(しばた)きよ子

深雪(ふかゆき)後の山稜(さんりやう)の上(う)の空(そら)を「平(たい)ら」とは、さすがに白馬山麓(はくばさんろく)に住(す)む生活者(せいかくしや)の着眼(てつがん)と感心(かんしん)した。空(そら)も力(ちから)を出(で)しきつた後の虚脱感(きだつかん)。色(いろ)を持たないでどんよりと、なんとか繕(つくろ)っている感じ(かんじ)。巧(たく)い。

初風(はつふ)や沖(おき)に潜(ひそ)める艦(かん) 一志貴美子

序 破 急 の い ま 破 の 刻 か 新 松 子 昭和 60 年

「鷹」（昭和六十一年一月号）所載。昭和六十一年一月「鷹」俳句会賞受賞。当月集作家無鑑査同人となる。大学では教授に就任。四十九歳。ふと、いまが人生のピークかとの思いがひらめく。「わが主張・わが俳論、もうひとつの世界」（「俳壇」二月号）を書く。翌年には長野県立明科高校の校歌を作詞。『春の鹿』所収。

いのちかぎり信濃の枇杷の実をつけし 昭和 61 年

「岳」（昭和六十一年七月号）所載。「杉浦幸子さん病臥」と前書。「岳」事務局を引き受けられ、献身的な尽力者。これからという時に倒れる。三河出身。夫（信州名鉄副社長）範昌氏が会社を退職して七十五日間介護に専心されるが、八月十二日逝去。悼句献呈「出穂をいざなふ暑さ逝きにけり」。その後範昌氏は俳句に集中される。『春の鹿』所収。

山晴るるきちきち着地いい加減 昭和 61 年

「俳壇」（昭和六十一年十月号）巻頭二十句の第一句。小県郡田沢温泉の吟行句。秋晴の好日。きちきちだったのが盛んに飛んだ。「かの児ろと闇をひとつに虎鶴」も同時作。「かの児ろと寝ずやなりなむはだすき浦野の山

に月片寄るも」（東歌）を踏まえる。『春の鹿』所収。

春の鹿まとへる闇の濃くならず 昭和 62 年

「鷹」（昭和六十二年七月号）所載。湘子推薦句。奈良公園幻想。「花桐の加賀は幻濃きところ」など、「幻」「闇」への志向が根底にあった。どこかに死の意識も。「宮坂静生俳句管見」（大串章・「俳壇」一月号）が書かれ、「地貌論」（「俳句研究」一月号）を書き出す。以後、「風土」ではなく、「地貌」を追求。地名監修尾形仿・宮坂静生『俳枕』（朝日新聞社）全七巻を鈴木俊策と企画、配本開始。『春の鹿』所収。

青空に闇が待ちあゐる植田原 昭和 62 年

「岳」（昭和六十二年六月号）富山から金沢行。「砺波」と前書。杉浦範昌氏の運転、徳子同道、よく全国を旅した。昼の砺波平野の田植後に佇む。青空の奥に、もう夜の闇が待機している。闇の執念に感動した。『春の鹿』所収。

濁りこそ川のちからや白緋 昭和 62 年

「鷹」（昭和六十二年十月号）湘子推薦句。原句は「川のいのち」であった。梅雨の頃、上高地へ向かう時であったか、同行の湘子先生が「川のちから」のほうがよくはないかと言われた。途端に身を貫く感動があった。『春の鹿』所収。

艦にいくさぶねとの意味を見つけたのがいい。軍艦の艦。新年早々、あわただしい東シナ海や日本海の海上の状況を身近に、下五音の鍾のような語で一句が緊まった。社会的な事柄への関心も俳句の貴重な種。探求心がある。

風を切るときに鷹の眼青むらし 鎌田 文子

作者は北海道在住。鷹の実態の描写に、きびしい鷹の生存への作者の畏敬のところが感じられ、胸を打つ。鮮烈だ。

年の尾や和毛密なる山羊の耳 西牧千恵子

大年の山羊への着眼に、人よりも家畜へ心を放つ作者の大らかさを感じる。北海道での生活体験がどこかに生かされているものと思う。歳月の深まりを山羊の耳にみた。愛情とは人を超えて万物に注がれるものか。

同人集から他に推薦候補作を掲げる。

あらぬ方向きをる目玉初鏡 小林 貴子

雪嶺や幾たび生れ変わるか 唐澤南海子

継がせたき財はなけれど雑煮餅 佐藤 健

河豚の子の糠漬鹹し加賀泊 樋上 照男

東風と上路の山のこと——新季語と地名の迫力

東風や上路の山の潮まみれ 幹 自聲

「東風」とは冬の日本海地域で西北から吹く強風をいう。冬は地域限定の風が多い中でも知られている。謡曲「山姥」に見える日本海の難所親不知の上の山が「上路の山」。吹き上げる東風のはげしさに浪飛沫が浪の花をつくり、山裾は潮まみれ。真冬のごうごうたる海鳴りが聞こえるようだ。今月号の幹自聲の作は充実。目を見張る。

半鐘を鳴らせど雪の降りつづく 清水 道徑

越後三条在住。深雪に警戒せよとの半鐘であろう。雪はおかまいなく、しんしんと降る。生活者のお手上げの顔が見えるようだ。防災の半鐘でなく、降雪注意報であるところに地貌の独自さを感じさせられ、注目した。

春光になほ爆風を見るやうな 秋山 格雄

どこと限定された表現ではないが、私は中近東の一時休戦の戦場を思い描く。シリア辺か。春の光が射し、たしかに戦は止んだ。しかし住民の気持は早々と切り換えられるものではない。はっと爆風を感じ怯える。鋭い句と思う。穏やかな自然を詠いながら、さりげない社会詠となっている。

大寒の喧騒少年と鼯 中岡 草人

鼯も冬の季語であるが、大寒のさなかの鼯の出現に大騒ぎ

となった少年を描く。どこかなつかしさが漂うのは少年の日の回想詠か。「喧騒」との漢語に年代を思った。生活の場で颯を見ることが少なくなった。あるいは少年も。

枯歯染の地母神抱きをする形 原田 宏子

冬の枯れた歯染が地に貼り付いているさまを、正月飾りの歯染のイメージも加わり、「地母神抱きをする」と捉えた。よくゆきとどいた連想を働かせ得る作者。地味な句材を手応えある作品に仕上げる才能の持主である。力ある作。

降誕祭指紋の中に銀河系 島田 葉月

クリスマスは神の世の秩序が整う日。神は造物主。指紋に銀河系宇宙を想像した自在さに感銘した。どの指の指紋にも銀河系がある。身近な人体もかく不思議に充ちている。意欲作。

タピスリー冬の黄昏織り込まれ 小伊藤美保子

タペストリーとも。タピスリーはフランス語。金糸銀糸を織り込んだ壁掛け。祇園祭の山車のタペストリーも周知。凋落の美意識を「冬の黄昏」を描いて形象化した才能にロマンを感じる。こつこつと努力を惜しまない作者。この一作が多分開花のきっかけになるう。

初雪やいい眸して少年僧 河野 正子

初雪と少年僧との取り合わせ。ういういしい。瞥見であるうが、作者の少年僧への称美のイメージが立つ。

四方の春柩に入る体験会 水谷 亮一

世はさまざま、棺桶に入る体験をするという。死をみつめる死生学の一環か。寺の主催などで、こんなこともあるう。「四方の春」と置き、作者は肯定も否定もしていない。なんでも体験してやろうという好奇心が生きている。

今月の秀句

咳の親玉咳の子分を使ひけり 金子 圭子

演劇人の作らしい。清水次郎長か国定忠治ではないが、咳一族。親分の咳はインフルエンザ。子分も同じ。子分の使命は只今、流行らせることが至上命令。あっちの東京駅の人混み、こっちの杉並区の幼稚園ととび廻って咳の子をふやす。ふやした子分には相撲協会の○○ではないが奉頌金が出る。咳の親分は地獄での地位がぐーんと上り、大王お付きに出世する。というドラマを作者は考案中。そんな作でおもしろい。

今生やけふ降る雪のあたらしき 遠藤 靖子

下句は家持の新年詠の万葉調を思わせるが、「今生」の上句によって、俄かに人生観の深さが出た。老いると、見るものに新しさを意識する。雪に新しさを感じるのは類想的であるが、しみじみした情感があらう。

手に入れて輝き失せし毛皮かな 北村 宣枝

着想にご婦人の生活者の、とある日の実感がある。デパートで見たときのときめきはこんなではなかったとの反芻しきり。人目が支える外と、わたしひとりの内とはかくも違うもの。類想感はあるうが、共感者が多い。

元旦の一座の中や鳥・獣 さとうゆう

「元旦の一座」との自然界の捉え方に共感した。人中心でなく鳥や獣を配したところに大らかな見方がある。鳥獣にとっても元旦が新たなよろこびの時だとの晴れやかさがある。

林冠に組まるる星座去年今年 平野 規子

静謐な大景の作。二年参りの折、見上げる梢に拡がる星座への感激が快い。自然の骨格をしっかりと捉え、新しい年への心意気も伝わる。「林冠」が生きている。

びょうびょうと弥三郎ばさの吹雪まく 木村由里子

童話や民話の研究者。ご自身も書いている。小千谷辺の雪深い地の「弥三郎ばさ」の伝承がテーマ。「そんな晩は弥三郎ばさの吹雪が捲いてな……」と咄がはじまる。子どもたちは炉辺に膝を揃えて語りに引き込まれてゆく。地貌の持つ厚みをしつかりと捉えようとの地道な思いが共感を呼ぶ。

枯山は飢返さず吾子は亡し 上條 忠昭

沈着な一句に、親に先立ち吾子を失った親心の限らないさみしさが滲む。時が経っても子は戻らないとの思いは深い。何回も反芻しながら到達した一つの思いの一句と思う。「枯山は飢返さず」がそれ。

岳集から推薦候補作を掲げる。

喰はれある河豚に野心のありさうな 西澤日出樹
ぼつぺんの切れのよき音港町 今野 晶子
裏切りのなきがごとくに白鳥来 伊藤由希子
閨門の川風強く年明くる 太田 薫
亀次郎の不屈の魂や鮫を裂く 田添 博美
煤日和あかずの間より窓開ける 山本 豊子
切干や果てなき道に正義とは 荻原 昭廣
あかがりや重機の爪の垂れてをり 穂苅 真泉